

いつも一緒 富山のペットたち

今回は猫の糖尿病についてお話ししましょう。私たち人間は生活習慣病の一つと考えがちですが、実は猫もこの病気にかかっています。糖尿病になると、体の臓器や器官が働くために必要なエネルギー源として大切なグルコース(ブドウ糖)を使うことができません。となつてしまいます。肉食物である猫は他の動物と違い、糖質(炭水化物)からではなく、アミノ酸(タンパク質)から糖を作る能力が非常に高い動物です。猫が甘いものに対する味覚があまりないのでないかといわれているのも、そのせいかもしれません。



今野 浩明

高島獣医科富山東病院長
(富山市水橋小出)

猫の糖尿病

猫は、興奮したり、食欲不振になつたり、さまざまな病的ストレスが体にかかったりすると、血糖値が上昇します。さらに、血糖を肝臓に取り込むために必要なグルコキナーゼという酵素がないため、血糖値が上昇したままになりやすいのです。

インスリン分泌

食事に伴い、膵臓からインスリンが分泌されます。インスリン



肥満は糖尿病の危険因子の一つ。肥満にならないように普段から注意しよう

食事や水の量に注意

の働きにより細胞は糖を取り込み、エネルギーとして利用することができません。糖尿病は、インスリンを分泌する働きが低下することでインスリンが絶対的に不足したり(1型糖尿病)、インスリンはしっかりと分泌されているのに効きが悪くなったりする(2型糖尿病)ために、糖をエネルギーとして使うことができなくなります。その結果、さまざまな代謝障害を引き起こします。人や猫は、肥満が糖尿病の危険因子の一つとなることが分かっています。肥満になるとインスリンの効きが悪くなり、2型糖尿病にかかりやすくなります。

猫の場合、飼い主さんは健康状態の異常に気付きにくいようです。糖尿病による異常な兆候の典型として、水をやたら飲むことが挙げられますが、あまり気に留めていない方も多いと思います。猫の祖先は、砂漠で暮らすリビヤヤマネコだといわれています。水の少ない乾燥した所でも生きていけるような体の仕組み

です。また近年は、高齢の猫が発症するケースもたくさんあります。治療は、最終的には自宅で飼っている猫に毎日インスリン注射を打っていただくことになりま

「いつも一緒 富山のペットたち」は、毎月第1木曜日に掲載します。

を持つているため、飲む水の量が少ないのです。さらに、糖が利用できないことで、一時的に食欲が旺盛な状態になっていることもあるため、「うちの子は食欲があつて元気だ」と思い込んでしまいがちです。

カロリーオーバー

猫は一日かけて少しずつ食べる習性があるため、フードを継ぎ足してあげている方もいらっしゃるでしょう。そのため、食事の量を把握するのが難しく、食欲の低下に気付くのが遅れたり、過剰にフードをあげてカロリーオーバーになつたりしていることがあるかもしれません。実際、来院時にはすでに食欲がなくなり、水も飲まないという、非常に危険な状態で連れて来られるケースがよく見られます。